

主 題：遡られた王の誕生：最も低い所へ
聖書箇所：ピリピ人への手紙 2章5－7節

テーマ：神の御子イエス・キリストがどれほど“遡られた”のかを自分のこととして考える

先週から私たちはクリスマスのシリーズとして、へりくだられた王、キリストの誕生についてピリピ2：5から学び始めました。今回もその続きを一緒に考えてみたいと思います。まず、いつものようにみことばをお読みします。きょうは7節を中心に考えたいと思いますが、全体の流れをおさえるために、いま一度1－8節をお読みします。

ピリピ2：1－8

「:1 こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあ、御霊の交わりがあ、愛情とあわれみがあるなら、:2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」

○遡られた王：どんなに高い所から下られたのか？ 6節

さて、きょうの内容に入って行く前に、前回見たことを思い返してみてください。6節からイエス・キリストが人として生まれる前、受肉前にどんなに高い位置におられたのかを学びました。著者であるパウロは、キリストの誕生に関して、実際に布にくるまれて飼葉おけに寝かされている赤ん坊の姿ではなく、まずそれ以前の天での輝かしい主の姿に、私たちの目を向けさせていました。別のことばで言えば、キリストがどれほどへりくだられたのかを正しくとらえるために、この方が天でどれほど高みにおられ、そこからどんなに下られたのかを最初に教えてくれていました。そして、そんなパウロのことばのうちに、私たちは特に二つのキリストの姿を見て取ることができました。

1) キリストはすべての初めから永遠に神様であるお方

一つ目の姿は、キリストはすべての初めから永遠に神様であるお方だということでした。キリストは、人として地上に来られてから、すべてがスタートしたのではありませんでした。また言うまでもなく、受肉前は存在していなかったのでもありませんでした。イエス様は間違いなくすべての初めから、どんな時も変わることなく存在しておられた神様の御姿でした。この方は人としての姿をとってこの世に来られる前から、永遠に存在する神の栄光の輝きだったのです。そのことはイエス様ご自身も、例えばヨハネ8：58で「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです」とはっきりと言われていました。

2) キリストはすべての特権を有したお方

次に二つ目の姿として見られたものは、この方はすべての特権、権利を有したお方でもあるということでした。キリストはほかのだれでもない完全な神様であるからこそ、ありとあらゆることをご自分の意のままにする力を持っておられました。天にあって、天使や聖徒たちによってあがめられることも、父なる神様と聖霊なる神様との交わりを楽しむことも、永遠の初めから当然の権利として持つておられました。たとえこの方がそれらの権利をご自分のために用いられることがあろうとも、だれひとりとして、それに対して何も言うことはできない、そんな最高の地位におられたのです。

しかし、キリストはそんな高い所から、みずから進んでへりくだられました。ご自分を喜ばせるために自分の願いを優先し、天で持っておられたご自身の特権や権利を用いようともされませんでした。それらのものを喜んで一時的に横に置き、人として地上に下られたのです。この方は神のあり方を捨てられないとは考えませんでした。すべての初めから存在する永遠の神様が、あり得ないほど高く、栄光にあふれた所から測り知れないほどの犠牲を払って低くなられたのです。私たちは主の大きな犠牲の一部を見ることができました。私たちの限られた頭では到底理解などできないような、そんな謙遜の姿を目の当たりにしたのです。

改めて、キリストがどんなに高い所から下られたのかを考える時に、私たちはそのすばらしさに感謝を覚えたでしょうか？キリストの誕生の知らせを改めて考える時に、私たちの心には大きな喜びがあふれ出たでしょうか？そしてそれらに加えてキリストのうちに見られたこのへりくだりの態度を、私たち自身も追い求めていきたいという思いを、今あなたは持っておられるでしょうか？先週も言いましたけれども、パウロがこのみことばを記した時、彼は兄弟姉妹の一致を願って、その鍵として“謙遜”というものを挙げていました。3-5節にはっきりと「:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」と記されていたのです。同じ主のあわれみによって救われた神の家族が、一つのものとして生きていくためには、互いに人を自分よりもすぐれた者と思う、そんなキリストのうちに見られるへりくだりが絶対に欠かせませんでした。これから私たちはみことばを通して、キリストの誕生のすばらしさを見ていくのですが、このすばらしい知らせがいかにもすばらしくて、私たちがますます感謝をささげるべきものなのか、またもっと言えば、私たちがこのキリストの模範を見ていく時に、果たして自分のうちにキリストの示されたへりくだりの姿が見られるだろうかと自分自身に問いかけ続けてください。

○遜られた王：“どんなに低い所”へ下られたのか？ 7節

振り返りはここまでにして、実際の内容を見ていきましょう。6節ではキリストがどんなに高い所から下られたのかが描かれていました。7節では、キリストがどんなに低い所へと下られたのか、その姿を見て取ることができます。この方は高い所から下られただけでなく、いったいどれほどご自身をさらに低くされたのでしょうか？7節「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。」と、みことばは続いていました。これと同じ箇所を新改訳2017年版で見ると、「ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。」となっています。少し違いました。でも言っていることは同じです。永遠に存在し、栄光に輝くイエス・キリストはご自分のことを無にされました。神様ご自身であられるお方が、ご自身を空しくして仕える者、人となられたのです。と言われてもいったい何のことかよくわからないかもしれません。

◎「無にする／空しくする」：ギリシャ語“ケノー”

まず、考えてみましょう。パウロはここでキリストがご自分のことを「無にする」、「空しくする」と口にしていました。この「無にする」、「空しくする」ということばは、具体的に何を意味していたのでしょうか？キリストはいったい何を無にされたのでしょうか？人となられた時に、この方はご自身の持っていた何かを失ってしまったのでしょうか？この「無にして」と訳されていることばには、“ケノー”というギリシャ語が使われています。これはとても大切なので、よく覚えておいてください。そして、このことばには「中身を空にする」とか、「何かを空っぽにする」という意味も含まれています。なので神学者たちによって、これまで数多くの議論がなされてきました。いったいキリストはご自身のうちの何を空っぽにされたのだろうと、彼らは問い続けてきたのです。その結果として、多くの誤った考えや教えが生まれるようになりまし。例えば、ある人たちは、キリストがご自身を無にしたというこのことばを、何らかの形でキリストは完全な神様ではなくなったという意味でとらえたりするようになりまし。確

かに神様ではあったけれども、人となられた時にそれをすべて失ってしまったと考えているのです。またある人たちは、このことばを、キリストが神様の性質のすべてではなくて、神の性質の一部を失ってしまったという意味でとらえるようになりました。例えば聖さや愛や義といった不可欠な性質は変わらずに持っておられたけれども、人となるために全知や偏在、全能といった性質はなくしてしまったと考えたのです。でも果たしてこれらの考えは正しいのでしょうか？ 100%神様であるイエス様は、そのご性質を完全に空っぽにして、単なる人となられたのでしょうか？まるで水がいっぱいに入ったグラスの一部を注ぎ出してからつぎ足すかのように、イエス様は神様としてのご性質の一部をまず少し注ぎ出してから、人としての性質をその部分に取られたのでしょうか？

もちろん決してそうではありませんでした。イエス様は70%が神様で、30%が人になったのでもありません。この方はどんな時も変わることなく、100%完全に神様であるお方でした。もっと言えば、もしイエス様からたとえ0.000001%であろうとも、神様としてのご性質が失われていれば、イエス様はもう神様として存在することはできませんでした。すべての初めから永遠に存在しておられるキリストは、天におられた時も、また地上に来られてからも、一度として完全な神様としてのご性質を失うことはなかったのです。もちろんそのことはほかの聖書箇所でもはっきりと見て取ることができます。特に地上でのイエス様のことばや歩みを見てみれば、そのうちに繰り返し表されています。例えばご自分に敵対するようなユダヤ人たちに対しても、イエス様は語られていました。先週も触れましたが、ヨハネ10:30で「わたしと父とは一つです。」と、人々の前であかしされました。このことばを聞いて、ユダヤ人たちはすぐにイエス様のことばの意味を理解していました。だから彼らは石を取り上げて、石打ちにして殺そうとしたのです。怒りに燃えた彼らは、続くヨハネ10:33で「ユダヤ人たちはイエスに答えた。「良いわざのためにあなたを石打ちにするではありません。冒瀆のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。」と口にしていました。こうしてイエス様は、自分に敵対するような者の前でも、ご自分が神様であることを明らかにされていました。

でもそれだけではありません。イエス様は同時に、ご自分の愛する弟子たちの前でも同じように語られていたのです。例えばヨハネ14:9-10で、私たちに父を見せてくださいと願ったピリポに向かって、イエス様は「:9……ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」と述べていました。また、そんなイエス様に対して、弟子たちもふさわしい礼拝をささげていました。弟子のひとりであったトマスもよみがえられた主を前にして、ヨハネ20:28で「トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」と発言していたのです。ですから、間違いなくキリストは変わらない神様でした。そのことをイエス様の敵たちも、また弟子たちもはっきりと目の当たりにしていました。そしてこんなお方がご自分を無にされたと言われた時に、それはこの方が一瞬でも神様でなくなったということを表していたのでは決してありませんでした。

では、いったいどんな意味でこのことばは用いられていたのでしょうか。そのことを理解する上で大切なのは、この「無にして」、「空しくして」と訳されていることばの意味を正しくとらえることです。先ほども述べたように、このことばには確かに「中身を空にする」とか、「何かを空っぽにする」というような意味も含まれてはいます。でも、このことばはこの箇所ほかに別の新約聖書の中で4回登場するのですが、その四つともすべて「無効にする」とか「取り消す」という意味で用いられていました。言い換えれば、このことばは何かを空っぽにするために注ぎ出すというような意味ではなくて、「何かの力や効果を無効にすること」、「無にしてしまうこと」といった意味で使われるのです。そしてそれこそがここでイエス様のご自身を無にされたという意味でもありました。この方はご自身の何かを注ぎ出さ

れたのではなくて、ご自身を無にされたのです。完全な神様であるイエス様は何かを失ってしまったのではなくて、ご自身そのものを無効にされたのです。

具体的に、キリストはどのようにしてご自身を実際に無にされたのでしょうか。その答えが7節の続きに記されていました。7節「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。」と書いていました。どのようにして、この方はご自身を無にされたのかというと、それは「仕える者の姿をとり、人間と同じように」なることを通してでした。キリストは神性を失うことによってではなくて、人となることを通してご自分を無にされたのです。永遠に存在する神様、イエス・キリストはそのご性質を失ってしまったのではなくて、奴隷の形を取って、人として生まれることを通して、ご自分を空しくされました。つまりこの方は、引き算ではなく、足し算によってご自分を無にされたのです。ジョン・マレーという神学者もこの点についてわかりやすく説明してくれています。「神の御子が人となって遜られたとき、それによってこの方が神の性質と特権を失い、神の御姿を人の姿に変えてしまったと考えることがあります。ご自身の神としての性質を空っぽにすることによって、失うこと、引き算によって貧しくなられたと言うのです。しかし、聖書はそのような考えを支持してはいません。この方は受肉した状態にあっても、その内に神の満ち満ちたご性質が宿っていました（コロサイ2：9）。人の子が貧しくなられたのは、神であることやそれから切り離せないご性質、特権を手放したからではありません。この方は以前の自分でなくなることによってではなく、以前の自分ではないものになることによって貧しくなられたのです。引き算ではなく、足し算によってなのです。」と。イエス様は人となって来られた時も、すべての初めから持っておられた神様としての御姿を失うことは決してありませんでした。この方は変わらず完全なる神様でした。天においても地においても、ただほめたたえられるべき存在だったのです。しかし、そんなお方がみずから進んで仕えるしもべとなられました。この方は確かに神様としてのすべてを持っておられました。だからこそその力やみわざを時に明らかにして、嵐を静めることがあったり、人々の考えを読み取ったりすることもあったのです。しかし、そのような力を人々の前でいつも完全に表すことはなさらず、真に人となられました。キリストは人となるためにご自分を無にして、へりくだられたのです。

イエス・キリストは、世界の始まる前から永遠に神様であるお方でした。この方はすべてのものを造られた創造主であって、主権者であるお方でした。天においても、地においても、ご自身の神としての特権や力を行使する権利を持っておられました。しかし、栄光にあふれたこのお方は、そのあり方を捨てられないとは考えず、人としてこの地上に行き、ましてや奴隷となられたのです。こうして人からほめたたえられるべき王様が、人に軽んじられ、軽蔑されるようになりました。人に仕えられるべき主人が人に仕えるしもべとなられたのです。いったいこの方はどれほど高いところから下られ、さらにどれほどご自身を低くされたのでしょうか。いったいこの方はどれほどの犠牲を払われたのでしょうか。まだ私たちはそのすごさにいまいちピンときていないかもしれません。神の御子がご自分を無にされたということの驚きがよくわかっていないかもしれません。だからこそ、7節に出てきた「仕える者の姿」と「人間と同じようになられ」という二つのことばを残りの時間でよく考えてみましょう。このことばを通して、私たちはどれほどキリストが低くなられたのか、へりくだられたのかを見て取ることができます。私たちはここにへりくだられたキリストの二つの姿を覚えることができるのです。

1) キリストは奴隷となられた 7 a 節

では、改めて7節を見ていただくと、「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり」と書いていました。まず一つ目に覚えることのできるキリストの姿は、この方は奴隷、しもべとなられたということです。ここで勘違いしてほしくないのは、イエス様が仕える者、しもべの姿を取ったというのは、単にしもべがするような格好をしていたという話ではないということです。ここで「姿」と訳されていることばには“モルフエー”というギリシャ語が用いられていました。このことばは、先週6節に登場していた「キ

リストは神の御姿である方」と訳されていた、この「御姿」と全く同じことばでした。この“モルフェー”ということばには、その人物の内側にある性質や本質が、そのまま外側に現われることを表していました。その人が持っている内側の本質、性質がそのまま外側に出てくるのです。そんな姿を表していたのです。イエス様は単に神様のような格好をしていたのではなくて、その本質すべてが完全な神様でした。そしてこれと同じように、キリストは仕える者の姿をとってこの世に来られたのです。つまり、この方は見せかけではなくて、完全なしもべとして、仕える者として誕生されたのです。

この奴隷ということばを耳にして、ある程度は私たちにも想像できるかもしれません。この奴隷というのは、当時の社会において最底辺に位置づけられている人物たちでした。彼らは自分たちの持ち物や権利はいっさい持つことができず、自分たちのいのちでさえも主人の所有物だったのです。自分の望むこともできません。自分の願う場所に行くこともできません。自由など到底ありませんでした。そんな奴隷の姿を、ウォルター・ハンセンという人物もこんなふうを描いています。「奴隷は最も低い地位にあり、無力で、何の権力も持っていません。栄光もなければ、名誉もなく、あるのはただ恥だけです。」と。奴隷というのは、そんな力も立場もない、恥ずかしい存在でした。彼らには文字どおり何もなかったのです。イエス様はそんな奴隷になられました。仕える者の姿をとって、この世に来られたのです。主ご自身がマルコ10：45で「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」と言われていました。

さて、ここで立ち止まってよく考えてみてください。何度も言いますが、この方は永遠に栄光あふれる神様でした。単にいろいろなすぐれた権利や特権を持っていたのではありません。この方は真の神様として、そのご性質を、その特権を完全に持っておられたお方でした。キリストこそ、まさに主の主、王の王だったのです。しかし、そんな偉大なすべてを持っておられるお方が、何も持たない者になって、みずから進んで父なる神様のみこころに従う者となられたのです。思い返してみてください。イエス様は繰り返し地上にあって、自分の望むことではなくて、自分を遣わした方のみこころを行うと口にされていました。例えば、ヨハネ6：38を見ると、そこにはこうあります。「わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行うためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行うためです。」と。私たちが福音書を読んでいると、何度も何度もこのようなことばを目にするからこそ、何か当たり前のように思っているかもしれません。でもイエス様はご自分の望むままをすべて行う権利も、力も持っておられたのです。この方は神様でした。でもその権利をみずから横に置かれ、進んで仕える者となられたのです。この方は自分の望むことをすべて行う権利や力もある方なのだと頭に入れて、イエス様のことばによく耳を傾けてください。例えばヨハネ5：30で「わたしは、自分からは何事も行うことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。」と。また、マルコ14：36にも「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」と書かれていました。イエス様はどれだけご自身をへりくだらせたのでしょうか？この力あるお方には、すべてのことが可能でした。しかし、自分を遣わされた方のみこころを行うために、イエス様は自分からは何事も行うことができないと言われたのです。すべてをできる方が私は何事も自分からはできないと言われたのです。そして何よりもご自分の前に置かれていたその杯——十字架の苦しみをみこころに従って受けられたのです。

こうしてイエス様は地上にあって、いつも父なる神様のみこころに従われました。父なる神様が喜ばれないようなことばを発することもなければ、喜ばれないような行いをする事もいっさいありませんでした。ご自分を無にされたキリストは、最初から最後まで完全な仕える者として、奴隷として歩まれたのです。すごいと思いませんか？この方は、いったいどれほどご自身をへりくだらせたのでしょうか？どんなに低くなられたのでしょうか？でも同時に、私たちはよく立ち止まって考えなくてははいけません。そ

れはみことばがこの主のうちに見られる同じ心構えを持っていなさいと私たちにも求めていたからです。果たして私たちはキリストのように自分自身をへりくだらせているでしょうか？自分の権利をいつも主張するのではなくて、主のみこころに喜んで従う者として歩んでいるでしょうか？かつての信仰者たちはそのように歩んでいました。パウロやテモテも、このピリピの手紙を記した時に、手紙の最初で自分たちのことをこう言い表すのです。ピリピ1：1に「キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから、ピリピにいるキリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、また監督と執事たちへ。」と書かれていました。彼らは自分たちがどんな存在か、わかっていました。自分たちはキリスト・イエスのしもべであると口にしていたのです。またみことばのいろいろな箇所、キリストによって救われた者たちはみな、今はもう神様に買い取られ、奴隷として歩んでいることをも教えられていました。例えばローマ6：22には「しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。」と書いていました。だとすれば、私たちは今をどのように歩んでいるでしょうか？キリストによって救い出された者たち、買い取られた者たちは神の奴隷として今を歩んでいるのです。果たして私たちはへりくだって、人を自分よりもすぐれた者と考えているでしょうか？それともいつも自分の思いや願いを訴え、自分がふさわしく扱われていないと不満を口にしているでしょうか？考えてみてください。本来であれば、私たちはただ永遠のさばきだけが値する存在でした。それ以外にも、私たちは何にも値しない存在でした。反対に、永遠の神様であるキリストは、栄光も誉れもすべてのものに値する存在でした。しかし、この方はそのような特権をみずから横に置いちゃったのです。神様として扱われて当然の方にも関わらず、その権利を主張されませんでした。最も高いところにおられたお方がみずからご自分をへりくだらせて、父なる神と人ともに仕えるしもべとなられたのです。何度も言いますが、イエス様は力ある神様でした。でもこの方は地上において枕するところもなければ、人々に憎まれ、さげすまれ、ひどい扱いを受けられました。また、最も助けを必要とする窮地の場面であって、弟子たちは裏切り、逃げ出したのです。どう考えてもご自身に値しないようなものを経験されました。でも、そんなことを経験したイエス様は、「なぜ自分はこんな扱いを受けなければいけないのか」、「どんなに教えても、いつまでもいつまでも言い争っているような弟子たちと過ごす時間などむだでしかない」、「こんなにも感謝もない、愚かで、何度も何度も過ちを犯す世の人々に対して、どうして神である自分が仕えないといけないのか」と言われていました？そうは言われていませんでした。本来絶対に値しないような扱いを受けていたとしても、主は変わらず父なる神様のみこころに従って、みずからへりくだり、助けを必要とする罪人に仕えられたのです。すべてのものに当然値する方が、それを横に置いてしもべとなられたということです。

ただ神様からの永遠のさばきにはしか値しない私たちが、恵みによって救われて、恵みによって、今も必要な物がすべて与えられているのです。私たちが日々の生活を見た時に、これは私に値するものなのだとと言えるものは一つとしてないのです。どれを取っても、私たちに与えられているものはすべて神様からの恵みでしかありませんでした。そんな私たちが何かを自分の権利だと主張して仕えることをしないなどということはあっていいのでしょうか？自分はこんな扱いにはふさわしくありませんと、不満や文句を覚えて、神様や人に自分を与えようとするのを拒むようなことがあってよいのでしょうか？私たちがこの先、主のしもべとして歩んでいこうとすれば、ますます多くのものを犠牲にする必要が出てくるでしょう。人々にひどく扱われることがあるかもしれないし、自分のしていることをだれにも認めてもらえない、そんなこともあるかもしれません。でもそんな時に、あなたならどうします？自分自身のこととしてよく考えてみてください。私たちの愛する、すべてに値した主はご自分を無にして仕える者の姿をとられました。そんな大きな犠牲とへりくだりの模範を私たちは示されたのだとすれば、果たして私たちはどんなキリストを明らかにして歩もうとしているのでしょうか？

2) キリストは完全な人となられた 7b節

さて、もう一度7節に戻ってください。残っているもう一つのことばも一緒に考えてみましょう。パウロは「ご自分を無にして、……人間と同じようになられました。」と記していました。二つ目に覚えることのできるキリストの姿は、この方は完全な人となられたということです。ここで「人間と同じように」と言われていたけれども、これは非常に大切なことでした。イエス様は確かに人としての性質をすべて持って、完全な人としてこの世にお生まれになったのですが、同時に私たちとは違って、罪はいつさい持っていませんでした。この方は今までも見てきたように、変わらない完全な神様であるからこそ、罪に墮落した存在となることなど絶対にあり得ませんでした。ですからこの方はそんな罪の部分を除いて、私たちと全く同じようになられたお方だったのです。マッカーサー先生も以前、人となられたキリストについてこのように述べていました。「人間の父親を持たず、女から生まれたイエスは、他の子どもと同じように、愛する両親の思いやりや世話を必要としました。そして程度の差こそあれ、他の子どもたちと同じように成長し、知恵が進んで、背丈も大きくなり、神と人ともに愛されるようになったのです。飢えと渇きを覚え、痛みに苦しみ、悲しみを味わうこともありました。他の人と同じように、疲れて弱さを覚え、睡眠を必要とされることもありました。また、ご自分は罪を全く犯されませんでした。それでもすべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」と。神の御子であるイエス様は、ご自分を無にして人となられました。天において栄光にあふれた力あるお方は、そのあり方を捨てられないとは考えず、みずから進んで弱さを覚える人となられたのです。そして確かにこの方が完全な人として試みを受け、苦しみを味わわれたから、同じように弱さを覚える私たちに同情し、助けを与えてくださるのです。ヘブル2：18でも「主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができになるのです。」と記されていました。これがキリストの示されたへりくだりでした。まことの神様であるお方が真に人となられたのです。すべての力や権威を持った偉大なお方が無力なひとりの赤ん坊としてお生まれになりました。いったいどれほどまでにキリストはご自身のことを低くされたのでしょうか？いったいこの方はどんなに大きな犠牲を払われたのでしょうか？

もしその測り知れないそのすごさがまだ見えていないのであれば、立ち止まって一緒に考えてみてください。この世界のすべて、小さな草花から太陽や星といったものに至るすべてを造られた創造主が、ご自分の造られた人と同じように、血と肉を持つものとなられたのです。圧倒的な力を持ったお方が、両親の助けを必要とする小さな赤ん坊として生まれたのです。人の造り主が、人となられたということを感じる時に、いったいどれほどこの方は低くされたのでしょうか？また、そんな力を持った全能のお方は、疲れや弱さを覚えて休まれることもありました。でもこれはあり得ないと思いませんか？この世界のすべてのものを創造された時に疲れることなどなかったお方が、疲れて井戸に腰かけて休むこともあったのです。いつもどんな場所にでも存在することのできる偏在のお方は、実際に歩いて町々を移動されていました。始まりなんてない永遠の初めから常に存在されているそのお方は、限られた時間と場所にとどまるようになられました。だれの助けも必要としない、人の手によって仕えられる必要などない、そんな自存の神様が必要を覚えて飢えや渇きさえも味わわれたのです。

こんな主の姿を感じる時に、この方はいったいどんなに測り知れない犠牲を払われたのでしょうか。もう何度も言いますが、永遠なる神様だったイエス・キリストには、犠牲を払って、ご自身の持っている力や特権を横に置く必要などありませんでした。この方はその権利をご自分のために用いて当然でしたし、それに値するお方だったのです。しかし、この方は父なる神のみこころに従う喜びのために、もっと言えば、私たちのような罪人に対する大きな愛のゆえに、ご自身の持つおられる権利を無とされたのです。人としての救い主を必要としていたのは、ほかのだれでもない私たちでした。それは私たちがみんな聖く正しい神様の前に罪を犯したがゆえに、生まれながらに神の御怒りを受けるべき存在だったからです。私たちはその罪のための償いをしなければならない存在でした。でも、ここに大きな問題がありました。それは罪に汚れた私たちのうちにはそのような力など全くなかったということです。

私たちには何もできませんでした。ただ、神様だけがその罪を贖うことができました。人の犯した罪の問題は、同じ人が代わりのいけにえとしてささげられる必要があったのです。だからこそ神様の驚くべき知恵によって、神様が人となって来られたのです。それがイエス・キリストでした。

ヘブル2：14-15、17に「:14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、:15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。……:17 そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。」と言われていました。イエス様は完全な神として、また完全な人としてこの世に来られました。そしてこの方にしかできない贖いのみわざを十字架と復活を通して成し遂げ、ご自分の元にやって来る者たちに罪からの救いを用意してくださったのです。だからもしこの中に、まだこのキリストを自分の救い主として知らない方がおられるのであれば、どうかこのクリスマスの時に自分のこととして知ってください。罪の奴隷として歩み続けるのではなくて、自分の罪から立ち返って悔い改め、この方信じ受け入れて、罪からの救いを手にしてください。主にあるこの最高の喜びというものをどうか自分のものとして帰ってくださることを心から願っています。

また、このキリストを知っているとされる兄弟姉妹の皆さん、まさにこのピリピ2：3-5でも言われていたイエス・キリストはご自分のことを中心にするのではなく、ほかの人を顧みられるお方でした。この主は、いったいどれほどご自分のことをへりくだらせたのでしょうか。人として来られる前に持っていたすべての富や栄光を、神様としての特権を無にされて、代わりに人としての性質を取って、弱さや疲れ、悲しみを覚えられ、父なる神様とすべての人々に仕えるしもべとして、従順に最期まで歩まれたのです。この方は間違いなく、ご自身の益のためではなく、ほかの人の益のためにご自分をささげられていました。そしてこの方のへりくだりのみわざによって、ただあわれみのゆえに、私たちは救われて神の子ども、義の奴隷とされたのです。へりくだられた主の姿を目の当たりにしたのであれば、私たちはどのように応答し、どんな謙遜を主と周りの人に示そうとするでしょうか。もしこの主を知らないのであれば、絶対にこんな謙遜はできません。だから自分自身によく問いかけてみてください。果たしてキリスト・イエスのうちに見られるものが、あなたのうちに今見て取ることができるでしょうか？私たちの愛する主人であるイエス様のような心構えを持って、日々を歩んでいきたいと願っているでしょうか？それともこれまでも今もいつも自分が中心で、ほかの人を顧みることのない歩みでしょうか？自分の思いどおりになっていなければ不満を抱いて、自分の主張を押しつけようとしているでしょうか？

もし難しさを覚えるのであれば、イエス様が、ご自分が受けて当然の権利や立場を前にして、父なる神様の栄光と人々の益とのためにへりくだり、自分自身の幸いを求めるのではなく、そういった権利を横に置かれたことを思い出すことです。元から何も持っていない、ただ神様のさばきにのみ値するような私たちが、恵みによってすべてが与えられている私たちがどのようにしてへりくだるでしょうか？この主の姿を覚える時に、主の栄光とほかの人の益とのために、私たちにいったい何ができるでしょうか？クリスマスは私たちの愛する救い主イエス・キリストが人として来てくださったことをお祝いする日です。この方は神である方、でもそのことを捨てられないとは考えず、仕える者として人として来てくださったのです。私たちはそのすばらしさを感謝することができます。この主が来てくださったからこそ、私たちは今救いを喜び、楽しむことができます。このイエス・キリストの誕生を覚える時に、私たちは賛美しながら歩いていくことができます。でも同時に、私たちがこのような主に救われたのであれば、私たちの責任は、この主のうちに見られるへりくだりを持って歩み続けていくことです。みことばはそのように私たちに求めていました。できるから神様は私たちに求めておられるのです。主の力に頼りながら、ともにこのことを求めていきましょう。